

『大乘莊嚴經論』（求法品）の原典再考並びに『唯識二十論』の第一偈、第二偈の原本について（舟橋）

『大乘莊嚴經論』（求法品）の原典再考並びに『唯識二十論』の第一偈、第二偈の原本について

舟 橋 尚 哉

『大乘莊嚴經論』求法品の原典に関しては、「大乘莊嚴經論の原典考—求法品を中心として—」（仏教学セミナー第27号）や「大乘莊嚴經論（求法品）の原典の考察—大谷探検本A、Bを用いて—」（印度学仏教学研究第27巻第1号）で一応考察したが、その Lévi 本の原本と考えられる *Ns* 本⁽¹⁾やそれからの転写本である *Nc* 本⁽²⁾など、いくつかのネパール写本を手に入れることができたので、これらのネパール写本を用いて求法品を再検討してみようと思う。

まず初めに求法品第八偈、第十二偈の長行、Lévi 本（p. 57, 1. 26）の *parikarmabhūmisampraksāṇakārahāvanāḥ* の *saṃpraksāṇā* ひまが、Bagchi 本（p. 58, 1. 23）でもこのままだである。しかしチベット訳が *ses pa*（影印北京版 74—1—6、チルゲ版 167a）であるところから、長尾博士の *Mahāyāna-sūtrālamkāra* の Index p. xiv, 1. 25 ひま ? (*Tib. ses pa*) とあり、*saṃpraksāṇā* の語に疑問を持つておられる。*Ns* 本（48a, 1. 3）に

は *saṃpraksāṇā* とあり、*Nc* 本（40a, 1. 5）にも *saṃpraksāṇā* となっている。また安慧釈（影印北京版 275—4—7）でも、これに相当するチベット語は *hogs pa*（了解する）とあるから、従ってこの *saṃpraksāṇā*（護⁽³⁾）は *saṃpraksāṇā*（了解する）に訂正すべきであろう。

なお『瑜伽論』菩薩地（荻原本、Sk. p. 83, 1. 6）でも、*saṃpraksāṇā* の漢訳が「解了」（大正三〇、四九七c）となっている例が見出される。（宇井博士「梵漢対照菩薩地索引」八三頁参照）ただ荻原博士編「梵和大辞典」によれば、*saṃpraksāṇā* も *saṃpraksāṇā* も漢訳は「解了」であり、いずれも「菩薩地」に出ているとあるが、*saṃpraksāṇā* が「解了」と訳されている例を私はまだ見出していない。

次に第二十一偈 a の *dvayābhatātrāṣṭi* であるが、私は先に山口博士の訂正（山口益仏教学文集上二四八頁）に従い、*dvayābhaso'vraṣṭi* と訂正した。（大乘莊嚴經論の原典考—求法品を中心

として、仏教学セミナー第27号参照。)しかしその後、Ns本(50a, 7.4)に *dvayabhatā'tra* とあること(Nc本、41b, 7.8は *dvaye-bhemā'tra* のように見え、またA本は *dvayebhemā'tra* または *dvayebhesā'tra* と読める)。また韻律の上から、先の私の訂正 *tathā dvayābhāso'trāsti* (U—U—) ではなく *sloka* の第一形 *paṭhyā* (U—U—) と合致しないこと(第四形式 U—U—, U—U— に類似しているが、必ずしも一致している)。むしろ Lévi 本の *tathā dvayābhata'trāsti* (U—U—) の方が韻律が *paṭhyā* と合致していること、これらの理由によってこの訂正には疑問が生じてきた。

そこで長行を見ると *dvayābhastāsti* となっている。長行の *abhastā* を偈頌では韻律の関係で *abhatā* としたと考えれば、結局、先の私の訂正は不要で、最初から Lévi 本のままでよいことになる。

次に第三十五偈並びに長行であるが、第三十五偈に関しては海野孝憲教授の訂正(Corrections of the Mahāyānasūtrāṇakāra XI. 35 印度学仏教学研究第22巻第1号)で大体よいと思うが、この偈は Lévi 本だけ、

yathā dvayapratibhāsād anyo na dvayalakṣaṇaḥ |
U—U—U—U—U—U—U—U—
iti cittam citrābhāsaṃ citrākāraṃ pravartate ||35||
U—U—U—U—U—U—U—U—

となっている。しかしこのままでは第二韻脚が二個所とも *sloka* の韻律と合っていない。長尾博士は

yathā dvayapratibhāsād anyo na dvayalakṣaṇaḥ |
iti cittam citrābhāsaṃ citrākāraṃ pravartate |
tatrābhāso bhavābhāvo na tu dharmāṇaṃ tatāḥ ||35||

と訂正する。Bagchi 本(p. 64, 7.5)もそれを採用しているが、*tatra* が *tathā* に、*tataḥ* が *mataḥ* とある。しかしNs本(53a, 7.1) No本(44a, 7.2)では、

yathā dvayapratibhāsād anyo na dvayalakṣaṇa itil |
cittam citrābhāsaṃ citrākāraṃ pravartate tac ca |
U—U—U—U—U—U—U—U—
bhāso bhāvābhāvo na tu dharmāṇaṃ atas tatra ||35||
U—U—U—U—U—U—U—U—

となっている。(海野教授の結論も大体これと同じであるが、*ārya* 調の指摘はないようである。)この偈は実は直前の第三十四偈と同じ *ārya* 調の偈であったために、Lévi も偈頌の個所を間違えたのである。(Lévi は第三十四偈は *ārya* 調であるとしているが、第三十五偈から第四十六偈までは *anuṣṭubh* (*sloka*) とあるとしている。)

ただこの第三十五偈の長行には、*cittam eva yasū tac-citrābhāsaṃ* とあるが、長尾博士に「*vasū* は *vasutas* の *citra* と正される。Ns本(53a, 7.2)では *cittam eva svatās citrā-*」
(または *svatac*)

『大乘莊嚴經論』(求法品)の原典再考並びに『唯識二十論』の第一偈、第二偈の原本について(舟橋)

bhāsam とあり、No 本 (44a, l. 2) は citam eva svatac citrā-
bhāsam となっている。チベット訳(影印北京版76—1—2)
は sems bdi rid であるから vastuś よりむしろネパール写
本のように svataś の方がよいのではなからうか。従って cit-
tam eva vastu tac- は citam eva svataś と訂正した方がよい
と思う。

次に第六十八偈の長行並びに第六十九偈の Lévi の還元梵
語の個所であるが、第六十八偈の長行に sarva-lokebhyo vi-
śiṣṭa-sarita- とある中の viśiṣṭa について考えるに、チベット
訳は mñon par bphags pa とあり、漢訳は「勝身」(大正三二、
六一七b)である。直前の Sk. viśiṣṭebhyas [ca] のチベット
訳が khyad par du (影印北京版79—2—5) となっている異な
るところから疑問が生じ、mñon par bphags pa をロケーシ
ュチャンドラの藏梵辞典で調べて見ると abhyudgata となっ
ている従ってこの還元梵語は viśiṣṭa よりも abhyudgata
か、それに類する語を想定した方がよいように思われる。

次に第六十九偈であるが、勿論サンスクリットは欠けてい
るから、Lévi の還元梵語しかない (Ns 本、No 本も欠)。
Lévi 本 (p. 74) の脚註に示されている還元梵語は次の如きも
のである。

anantā ca mahāntā ca sahadanaparivṛtiḥ |
U—U|U—U|U—U|U—U|U—U—

naishikī niranṭarā ca tatā pāṇcavidhā smṛtā ||69||

U—U—U—U—U—U—U—U—U—

この偈は漢訳からの還元梵語のようであり、韻律も合っ
ていない。しかし Lévi は仏訳を出版するときに、次の還元梵
語を示している。^(a)

sanatā sarvasatveṣu dīṣṭiś capi mahāntikā |

U—U—U—U—U—U—U—U—U—

para-guṇa-pratikāras trayāśāstir niranṭarāḥ ||69||

U—U—U—U—U—U—U—U—U—

この偈はチベット訳をよく参照しており、還元梵語として
は一応評価できるが、残念ながら韻律が合っていない。すな
わち、para-guṇa-pratikāras tra- (UUUU—UU—U—U—
は、第一韻脚の UU—U—U—U—U—U—U—U—U—
は、第一韻脚の UU—U—U—U—U—U—U—U—U—
も韻律としてはおかしいように思う。そこで私の考えた還元
梵語を示すことにする。

sanatā sarvasatveṣu dīṣṭiś capi mahāntikā |

U—U—U—U—U—U—U—U—U—

pratikāraḥ para-guṇāc ca trayāśāstir niranṭarāḥ ||69||

U—U—U—U—U—U—U—U—U—

a-b の部分は Lévi の還元梵語をそのまま用いることにし
て、c-d の部分のみ修正した。なぜなら a-b の部分は śloka

の第一形式 *patyā* と韻律が合っているからこのままでよいと思われるし、また上の部分は修正することによって *śloka* の第二形式 *vipula* と韻律が合致すると思われるからである。このような還元梵語にした理由は、

1 ' *para-guṇa* はチベット訳 (*gshan gyi yon tan*) の *gyi* と本文長行の *parbhyañ* より見て、コンパウンドの可能性が強いと思われること、

2、チベット訳 *dan* から見て、*ca* があったと思われること、

3、長行に *āsāsti-manaskāra* を解釈して、*tristhānāsamsanāt* としているから、*tryāsāsti* を想定しても不自然でないこと、

4 ' *pratikāra* は勿論 *pratyupakāra* の意であるが、偈頌だからこのように省略されていると考えられ、現に長行には *pratyupakāra* となっている。(Lévi 本では *pratyayakāra* とあるが、Lévi の仏訳は *pratyupakāra* と訂正されている。) *Ns* 本 (61b, 1.4) でも *pratyupakāra* となっている。

以上の理由によって、私は第六十九偈の還元梵語はこれだよいと思うが、あくまでもこれは還元梵語であるから、どうしてもこうであるとはいわないが、一応韻律も合っているし、チベット訳とも一致すると思うので、この私の還元梵語でよいかどうかを御教示頂ければ幸いである。

さて『唯識二十論』の第一偈第二偈であるが、Lévi 本には

『大乘莊嚴經論』(求法品)の原典再考並びに『唯識二十論』の第一偈、第二偈の原本について (舟橋)

還元梵語が載せられている。ところが *Pa. 3* 本には完全な形で第一偈と第二偈のサンスクリット原本が見出される。(これらの偈は Lévi の還元梵語しかないと思っていたが、すでに Lévi の仏訳にこれらの二偈の梵本が発表されていることを私は最近知った)

Pa. 3 本というのは *National Archives, Nepal, Stūcīpatram* 1. p. 44, No. 6462 で比較的古い貝葉のように思われる。全部で五葉、六行で書かれている。この写本は世親の『三性論偈』と『唯識二十論』と『唯識三十頌』の偈頌だけを集めたものであるから、長尾博士が「カトマンドウの仏教写本典籍」(岩井博士古稀記念典籍集所収)一九頁の「*Hem Raj Collection No. 34 Trisvabhāvakārikā, Viṃśatikakārikā, Triṃśīkākārikā by Vasubandhu, Nevārī, palm-leaf 1-5*」を写本と同じものと思う。

この *Pa. 3* 本によれば『唯識二十論』の第一偈第二偈は大体次のような梵文であると考えられる。

viñāpinātram evedam asadarhāvabhāsanāt
— — — — —
yadvat taimirakasyāsatskeṣaṇḍukādīdarśanam || 1 ||
— — — — —
na deśakālaniyamaḥ santānīyamo na ca
u — — — — —
na ca kṛtyakriyā yuktvā viñāpitr yadi nātrhataḥ || 2 ||

